

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19300286
研究課題名（和文） 国際文化探究学習のためのコミュニケーション・マネジメント・システムの研究
研究課題名（英文） A study of communication management system for international cultural inquiry-based learning.
研究代表者
坂本 旬（SAKAMOTO JUN）
法政大学・キャリアデザイン学部・教授
研究者番号：60287836

研究代表者の専門分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学・教育工学

キーワード：国際交流,異文化教育,情報教育,教育工学,国際理解教育,文化探究学習,カルチャー・クエスト,協働学習

1. 研究計画の概要

本研究の課題は、国際文化探究学習を目的に、次の3点とした。

(1) 「NetCommons」による文化探究学習の有効性の実証

国立情報学研究所が開発する「NetCommons」をコミュニケーションウェアとして活用することにより、国際的な情報共有と探究型文化学習を中心とした協調学習の有効性を実践的に検証すること。

(2) アジア諸国との共同的な文化交流学習の有効性の実証

欧米を中心とした英語圏だけではなく、中国や韓国、東南アジア、インドなどのアジア諸国と共同で「文化探究学習」プログラムを実施することにより、各国の児童・生徒により深い相互理解と文化的アンデンティティの形成の可能性を実践的に検証すること。

(3) 文化探究学習を活用した「異文化理解」や「外国語教育」のカリキュラム開発

これまでに開発・実践されてきた文化探究学習のカリキュラムの成果を土台に、文化探究学習のネットワークや教材を小・中・高、大学と幅広く活用してもらうため、異文化理解やコミュニケーション教育としての英語教育や日本語教育などの科目で利用可能なカリキュラムの開発を行う。

2. 研究の進捗状況

本研究は次のように進められてきた。

(1)2007年度

「NetCommons」サーバーの導入を行うとともに、協力校である押上小学校と NY 第 16 小学校、モットホール学校との交流を始める。同時に NetCommons 用の翻訳モジュールを開発し、日米の大学間の交流に活用した。これらの成果は中間報告書としてまとめている。

(2)2008年度

日米だけではなく、中国との交流をすすめると同時に、ICTを活用した国際文化交流教育の基礎理論として、メディア・リテラシー教育理論に着目し、全米メディアリテラシー教育学会に参加し、世界的なメディアリテラシー教育の理論潮流を把握すると同時に、テレビ電話会議システムなどの映像を用いた実践に着手する。また、協働学習の理論に着目し、その基本的なコンセプトを構想した。

(3)2009年度

江戸川区立鹿骨東小学校5年の3クラスの協力を得て、カンボジアのスラム地区にある小学校との交流授業を始める。メディア・リテラシー教育理論を基礎とした文化交流学習を実施した。具体的には、カンボジアについてのテレビ番組分析、ビデオレターの制作、テレビ電話会議システムを用いた交流学習を行った。さらに、法政の大学生とメコン大学生の協働によるカンボジアのスラム街の子どもの取材したドキュメンタリービデオを制作した。

(4)2010年度

日本とカンボジアの交流授業は本年度も継続しており、さらにそれに加えて大連第十六高校と法政第二中学高校との交流をはじめ、これらの成果を発表・共有する場として国際会議を実施する予定である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

ICTを活用した国際文化探究学習はメディア・リテラシー教育理論を基礎に据えることにより、より実践的な理論が構築されつつある。本年度は、コミュニケーション段階の交流からコラボレーション段階の交流を目指しており、これによって、本研究の目的はおおかた達成されるものと考えられる。

4. 今後の研究の推進方策

国際交流の対象をアジアへ広げるという研究方針に沿って、本年度は昨年に引き続き、カンボジアとの交流を行うとともに、中国との交流を行う予定である。

また、コミュニケーションシステムとして「NetCommons」を活用するが、これまでの実践研究により、個々人の顔の見える関係作りに見合ったシステムとしてSNS(ソーシャルネットワーク)システムが向いており、そのために「NetCommons」へのSNS機能の実装かまたは、国際文化フォーラムが運営している「つながる」などの外部ツールの活用を行う。

同時に、一昨年以來活用してきたテレビ電話会議システムも「NetCommons」に実装されることが望ましいが、現時点では困難であり、Skypeを併用することが考えられる。

このように、国際的な文化探究および国際交流教育の論理に見合ったシステムの改善や他システムの活用が今後は求められると考えられる。

また、一方で、これらの実践成果を元に、国内外の学会等において、メディア・リテラシー教育の理論的な交流と検討を深めていくことが必要であり、今後は本研究の成果を公刊することによって、広めていきたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 23 件)

①坂本旬、「文化探究学習」と異文化コミュニケーション、学校図書館、査読無、694、2008、15-17 頁

[学会発表] (計 6 件)

①坂本旬、「協働学習」とは何か、日本教育学会、2008年8月21日、佛教大学

[図書] (計 5 件)

①坂本旬、アドバンテージサーバー、『メディア・リテラシー教育の挑戦』第1章「メディア・リテラシー教育とは何か」、2009年、1-24 頁

②村上郷子、アドバンテージサーバー、『メディア・リテラシー教育の挑戦』第4章「メディア・リテラシー教育の磁場」、2009年、61-91 頁

③坂本旬、村上郷子、ほか、法政大学キャリアデザイン学部教授坂本旬、国際文化探究学習のためのコミュニケーション・マネジメント・システムの開発(課題番号:9300286)平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、98 頁

[その他]

CQCommons : <http://cq.i.hosei.ac.jp/>

海外との交流用、研究用データベースの構築